

国際政治経済学—下 川 雅 嗣

1. 伝統的国際政治経済学（政治学の視点から）

「国際政治経済学」は伝統的には「国際政治学」の中で国家と国家との関係を扱う「国際関係論」の中のひとつの分野として考えられ、主に政治学のフレームワークの中で理論が蓄積されてきた。第二次世界大戦後の冷戦時代は、「国際関係論」の関心は国家の「安全保障問題」に集中していた。しかしながら、冷戦の終結と共に、東西の二極構造は多極化に向い、西側陣営を束ねて

きた国際経済体制（ブレトンウッズ体制）が秩序安定能力を弱め、さらには経済のグローバル化が急速に進んできた。このような国際社会の変化に伴い、国際政治経済問題が安全保障問題と並ぶ重要な国際的問題となってきた。2001年9月11日の同時多発テロとそれ以降の所謂「テロとの戦い」も単に安全保障問題で論じきれものではなく、その根には不平等の拡大や石油利権に絡む経済的要因を無視できない。さらに、2007年のアメリカのサブプライムローン問題に端を発した2008年以降の国際金融危機とそれが全世界の人々に与える影響を考えると国際政治経済学の重要性はいよいよ増していると思われる。なお、「国際政治経済学」の扱う対象として具体的には、国際貿易、国際金融、国際資本移動、多国籍企業、国際労働移動、国際経済体制、地域経済統合、貧困問題、国際的不平等の拡大、経済発展、開発援助、グローバリゼーション、反グローバリゼーション運動、地球環境問題などテーマは多岐にわたる。

2. 新しい国際政治経済学（経済学の視点から）

一方、経済学者は1990年頃までは上述した様々な国際政治経済問題に対して、学会以外の場ではさほど意見表明をしていなかった。しかしながら、これら国際政治経済問題に関して社会に流布している意見や政治の場などで行われている議論を経済学の視点から見た

ときに、例えば市場メカニズムなど経済学の基本的理論を誤解したまま行われていることがしばしばあるように思われる。そして、そのような意見や議論に基づいて出された政策には、世界全体、また各国にとって悪影響を及ぼしかねないようなものもあるようである。

このような状況に鑑み、1990年代中頃から、徐々に第一線の経済学者が国際政治経済問題に意見を出すようになってきた。ここに政治学の視点からではない新たな国際政治経済学の可能性がある¹。例えば、しばしば国際貿易において、企業の競争と同じように国家が競争するようなイメージが流布しているが、これは経済学的に考えると一部の例外を除いて間違っている。貿易の本質は競争でなく協力である。しかもそのようなイメージは国内における失政を誤魔化するために、国民の目を他国との競争という幻想に向かわせようとして使われているように見える場合もある。また経済学の基本定理として、「競争市場は社会を最適にする」という命題がある。そこから市場至上主義を教条とする新自由主義のような考え方が生まれるのだと思うが、経済学がここで言う『最適』の意味は一般には良く知られていない。『最適』とは、効率的である、とか資源の無駄がないということであって、私たちが道徳的に、また感覚的にイメージする可能性の高い、貧富の格差があまり大きすぎないといったような意味は全く含まれていない。基本的には、市場メカニズムは効率性を高める、無駄をなくすということにおいては、まさに「神の見えざる手」と言われるほどに強力な力を持つが、貧富の格差には全く無関心であるし、所得分配機能は基本的には存在しない。市場メカニズムは、資源利用の効率性を高めるために、貧富の格差をどれだけでも拡大させる力を持つ場合さえあるのである。よって、市場至上主義的にグローバリゼーションが進んでいけば、すなわち新自由主義的グローバリゼーションは非常に危険である。その際に、国内的には政府が所得分配に関して責任を取らない限り、貧困者は社会的に完全に排除される危険性を持つであろう。以上2つの例をあげたが、このように経済学的に考えるとおかしなことが他にも多く社会に流布しているので、国際政治経済問題を考える際に、経済学的視点を持つことは重要である。

3. この分野に興味を持つようになったきっかけ

さて、この辺で筆者自身がこのような分野に興味を持つようになったきっかけを分かち合っておこう。まだ20代の頃に、フィリピンのマニラのスラムに何度も短期的に滞在したり、サマールというフィリピンでも一番貧しいと言われる島で一ヶ月間生活をしたりしたのがそもそものきっかけである。そこでは、貧困の厳しさ、悲惨さを体験すると同時に、自分自身が様々なしがらみから解放される自由も体験した。そして、貧困に苦しむ彼らに何か手伝えないかと思い、そのような申し出をした際に、あるスラム住民から、「私たちが貧しい生活を強いられているのは、私たちの貧しさを土台にあなたたちが豊かな生活をしているからだ。だから私たちに直接なにかすることを考える前に、まずあなたたちの社会を変えてください」と言われ、はじめて国際的な経済構造、経済のメカニズムに関心を持つようになったのである。そして、これが経済学の勉強をはじめた一つの動機となっている。

4. 貧困問題

上記のような動機で経済学をはじめたので、最初から筆者の主要な関心は貧困にあるのだが、実際、世界人口の約半数が一日2US\$の絶対的貧困の中で生活し、しかも富裕国と貧困国との格差は拡大し続けている現状²において、貧



困問題は国際政治経済問題の大きな領域である。そこで最後に貧困問題に対する筆者の考え方を紹介しておく。そのためには、最初のスラム体験以降の筆者自身の経験を分かち合う必要がある。最初はスラムにおける生活環境の悲惨さだけが目に付いたが、それ以後、アジアの諸都市のスラムを何度も訪れるに従って、その認識は次第に変化してきた。スラムで、多くの人々は、生きていくために様々な事業を行い、コミュニティなどの組織を作って劣悪な生活環境と戦い、生活を少しでも向上させようとしていた。そしてそれらの試みの多くは、創意工夫と意欲、活力に満ちていた。これらを知ることによって、スラムの人々が単に発展から取り残された人々の世界で、将来の発展に対して価値のないものではなく、逆に自分達のベースとなる文化を引き継ぎながら、かつ新しい未来を開いていくような可能性、今の先進国の発展の道筋とは違った代替的な発展の可能性と潜在力を秘めた場、今の日本の閉塞感を打ち破る鍵を学ばせてくれる場なのではないかと考えるようになってきたのである。しかもそのような彼ら自身のあゆみ（People's Process）は、先進国の人々はあまり意識していないが、すでに国境を越えてグローバルな広がりを持ってきている。しかしながら、その彼らの自立的な発展を妨げる障壁が多数あるのも現実であり、今の先進国及び富裕者に有利と言われる国際政治経済構造がその障壁になっている場合もあるであろう。これらの国際政治経済構造をきちんと分析し、この障壁を明らかにし除去するための学問的貢献は重要であると考えます。

5. 参考となる文献・ウェブサイト

[入門的参考文献]

Krugman, P. R. , Obstfeld, M. and Melitz, M., *International Economics: Theory and Policy*, 9th

Edition, Prentice Hall, 2011. (山本他訳『クルーグマンの国際経済学—理論と政策（原著第8版）：上巻貿易編（及び下巻金融編）』、ピアソン桐原、2010年）

※経済学の視点から書かれた国際政治経済学の入門的教科書。

Krugman, P., *Pop Internationalism*, MIT press, 1996. (山岡洋一訳『良い経済学悪い経済学』日経ビジネス人文庫、2000年)

※経済学者（2008年ノーベル経済学賞）が国際政治経済問題に対してわかりやすく意見を表明する必要性を事例と共に提起した読本。

Stiglitz, J. and Charlton, A., *Fair Trade For All; How Trade Can Promote Development*, Oxford University Press, 2005 (浦田秀次郎監訳、高遠裕子訳『フェアトレード：格差を生まない経済システム』日本経済新聞出版社、2007年)

※経済学者ら（Stiglitzは2001年ノーベル経済学賞）が現在の国際経済構造の不公平性の問題点を指摘した本。

ホルヘ・アンソレーナ、伊従直子『スラムの環境・開発・生活誌』明石書店、1992年。

※第三世界の貧困者、特にスラムのことを知るための入門書。

幡谷則子、下川雅嗣 [編著]『貧困・開発・紛争：グローバル／ローカルの相互作用』（地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書第3巻）上智大学出版会、2008年。

野林健、大芝亮、納家政嗣、山田敦、長尾悟『国際政治経済学・入門 [第3版]』有斐閣アルマ、2007年。 ※政治学の視点から書かれた伝統的国際政治経済学の入門的教科書。

[参考となるウェブサイト]

<http://www.worldbank.org/> 世界銀行 (WB) のHP

<http://www.wto.org/> 世界貿易機関 (WTO) のHP

<http://www.imf.org/external/index.htm> 国際通貨基金 (IMF) のHP

<http://www.undp.org/content/undp/en/home.html> 国連開発計画 (UNDP) のHP

<http://www.ilo.org/global/lang--en/index.htm> 国際労働機関 (ILO) のHP

<http://www.achr.net/> アジア居住権連合 (ACHR) のHP

※アジアの都市貧困者の現実、そこでの創意工夫のある取り組みを知るのに最適。

<http://pweb.sophia.ac.jp/shimokawa/> 下川の個人のHP

注：

¹例えばアメリカの大学における国際政治経済論（International Political Economy）の講義の内容を調べれば、同じ講義名でも明らかに政治学の視点からなされているものと経済学の視点からなされているものの判別がつく。筆者がざっとみたところ、2012年現在で、前者が6割、後者が4割といったところであろう。なお、現在筆者の講義においては、後者の立場で講義を行っている。

²世界人口のうち最富裕層20%の平均所得と最貧困層20%の平均所得の格差は、1960年に30倍、1991年に61倍、1997年に74倍、それ以降、国連開発計画等からの公式な発表はされなくなったが拡大を続けている。